

天声人語

イタリア人と結婚し、異国での暮らしを多くの随筆に残した須賀敦子さんが書いています。あるとき姑しゅうごから、こう言われたという。「ひとりの人を理解するまでには、一トンの塩をいっしょに舐めなければだめなのよ」▼たくさん塩を舐めるといふことは、数多くの食事をともにすること。伴侶であれ友人であれ、たくさんのおれしさや悲しさを一緒に経験することなのだろう。須賀さんの姑も昔、自分の姑から聞かされたというから、かの国で長く伝わる例え話なのか▼人間が生きる上でいかに塩が大切で、かけがえのないものか。それがにじむ言葉は少なくない。キリスト教で「地の塩」とは、不正や腐敗を見過ごすことのできない人物を指す。食べ物が腐るのを塩が防ぐからだ。変わることに誓いは、「塩の契約」である▼きょうは塩の日。戦国時代、塩の供給を断たれて困っていた武田信玄に、ライバルだった上杉謙信が塩を送ったとの言い伝えにちなむ。もっとも最近塩の語感にマイナスの印象が付きまとう。このところ耳にするようになった「塩対応」は、冷淡で愛想のない態度を指す▼塩はもはや貴重品ではなく、どちらかという嫌われ者。そんな現代社会を映し出しているのだろうか。スーパーには減塩をうたう商品が並び、自治体が減塩の指導に乗り出す。一方で、熱中症対策には塩分が不可欠だとも言われる▼過ぎていけないうし、足りないのもいけないうし、塩に限らない。いい塩梅おんばい、という言葉もある。